

# 『大学地域連携学研究』がめざすこと

What "Journal of Regional Cooperation with Universities,  
Local Governments and Industries studies" Aims to Achieve

青山清英<sup>1</sup>

Kiyohide Aoyama<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 日本大学文理学部 / College of Humanities and Sciences, Nihon University

## 1. 大学と地域連携を巡る今日的課題

いま大学は危機的な状況にあるといえます。ネット化、グローバル化、少子高齢化という日本を条件づけている三つの問題とグローバル化や競争の促進といった新自由主義的な価値観が結びつくことによってさまざまな困難が発生してきました。当然ですが、このようななかでも大学は教育と研究の質を高めることはもとより、社会への貢献を求められており、とりわけ地域貢献はその中軸となっています。このように大学に求められている役割は多様化していますが、財政問題もあり限られた資源でどのように取り組んでいくかということに知恵を絞らなければなりません。カリキュラムひとつ例にとっても、コマ数の削減などにより多様なカリキュラムの構成などはとても望める状況にはありません。大学における多様な学びは危機に瀕しています。一方で地域はどうでしょうか。

まず地方の状況を見てみると総じて深刻化しているといえるのではないのでしょうか。高齢化、過疎化、森林や農地の維持の問題などさまざまな問題を抱えているといえます。これは「地方の消滅」をもたらす問題です。このような状況をふまえて、持続可能な社会への転換のために「地方創生」が政策として進められてきました。これらの多くの試みのなかには「上手くいったもの」あるいは「上手くいかなかったもの」があると思われます。これらを反省的に検討していくことが極めて重要です。また、都市部においても教育、医療、福祉などに関わる問題が今回のコロナ禍によって可視化されました。都市には都市特有の課題や問題の現れが存在します。

このような状況をふまえて今、大学の有する多面的機能に期待が集まっています。それは「知の拠点」、「人材の拠点」、「ネットワークの拠点」などとしての機能です。このような多面的な機能を有する大学は、厳しい状況にありながらもその期待に答えていく責務があるのではないのでしょうか。したがって、いま大学と地域連携を巡る諸問題を考えていくプラットフォームが求められています。

## 2. 実践を大切にしていきたい

ここで大学の重要な役割のひとつである「知の拠点」としての機能について考えたいと思います。われわれが「知」という言葉を頭に浮かべたときに真っ先に思い浮かべるのは「形式知」ではないのでしょうか。形式知とは一般的に状況や個人の差異に影響されない一般化、抽象化された構造的知識と理解されています。自然科学のようにこの構造が量によって表現される領域では、この形式化はとても強化されていきます。このような形式知の創出は、「帰納」と「演繹」のサイクリックな繰り返しによって螺旋状に知を発展させることとすることができます。この形式知の創出が大学の中心的な営みであったことに異論はないと思います。しかし、形式知はその特有の厳密性ゆえに、特に人間に関わる研究ではつきもの実践の曖昧さやばらつきなどを排除してしてしまうこととなります。そこで注目されているのが実践知の存在です。

実践知とは形式知が排除してしまった実践の曖昧さや不確実性を重要視し、個人やその事例のもつ意味や価値を探究したものです。つまり、事実内に内在する意味に基づいて発見された知といえるでしょう。これまでこのような実践知は「非科学的」の一言で葬り去られてしまうようなものだったかもしれませんが、社会が抱える具体的問題が人々を圧迫している状況を前に、大学が有効な応答や援助を見つけることができなかつたという事実から今日、実践知の重要性が認識されています。

実践知の生成は実践あるいは現場と切り離すことができません。実践知は実践で得られた豊富な経験から帰納的に取り出されたものだからです。したがって、実践知による理論は、すでに確立されている一般法則を個別の事例に当てはめて事実を説明しようとするという意味での演繹的理論構築の方法に対して、帰納的理論構築によって生成され

たものと位置づけることができます。このように実践知はそれを生み出す方法としては形式知と関連をもちながら、形式知が排除してきた事実の意味や価値を主題的に取り扱うといった特徴を持つといえるでしょう。

以上のようなことから、理論と実践の関係は、形式知と実践知それぞれがもつ特徴によって異なることが分かると思います。形式知はその抽象度が高まれば高まるほど、実践の重要な要である具体性や独自性を排除することになる。一方で、帰納的に実践を理論化しようとすればその入り口として理論がなければ帰納的な理論の構築は実現しません。しかし、われわれがここで注意しておきたいのは、ここで必要な理論とは必ずしも形式知によって理論化された理論だけを指すものではない、ということです。むしろ必要なのは、実践知によって理論化された理論が重要であるということです。

### 3. 『大学地域連携学』の構築のために

以上のことをふまえて、われわれがその構築をめざす「大学地域連携学」の特徴を確認し、その学問的発展のプラットフォームとなる『大学地域連携学研究』がめざすものについて試論を述べておきたいと思います。

まず、大学地域連携学の研究対象としての特性ですが、この対象は当然のことながら多岐にわたります。これまでの研究では、教育、医療、福祉、その他さまざまな産業における「地域連携」を対象として研究が進められてきました。これからもこのような多様な領域を対象にして研究を進めていく必要があります。このように幅広い分野の研究が進められることによって大学を中核に据えた「地域連携」の本質が見えてくると考えます。

次に研究の方法ですが、これもまた多様です。周知のように研究方法はさまざまな視点から分類することが可能です。研究方法、すなわち科学の方法はいかえれば認識の方法です。よく「心理学的方法」とか「社会学的方法」というような区別が用いられますが、これは研究される対象による分類であって、認識の方法としての分類は「自然科学的方法」と「人間科学的方法」に分類されます。心理学における実験心理学的研究や社会学における調査研究などは、人間の価値判断や主観的なものの見方あるいは政治的、社会的、倫理的な立場から独立した、中立的知識の獲得が目指されるという意味において自然科学的性格を持つことになります。これに対して人間科学の方法では、対象としている事象を相互主観的に了解可能な人間の意味付与の枠組みに移して事実の意味を発見しようとし、つまり、前述した帰納的理論構築の視点です。大学地域連携に関する事実はこのようなふたつの認識論的視点を持つと思われます。

以上のことをふまえると、「大学地域連携学」は「大学地域連携」を対象とした「学際応用科学」であることが明らかになります。一般的に学際応用理論は既存の諸科学の研究成果を寄せ集めることによって問題を解決するという考え方から出発しています。言い換えれば、この研究アプローチは、ひとつの視点からだけでは問題の解決は困難であるから、いくつかの研究領域から問題に取り組むという構成的アプローチです。構成的アプローチは、その問題解決のために必要な学問領域の選定や結果の統合に関する問題などいくつかの問題を孕んでいますが、まだ「若い」大学地域連携学では学際応用理論としての発展が求められると思います。また、帰納的アプローチは当然、「事例研究」の形式をとることになります。つまり、『大学地域連携学研究』では「事例研究」が重要視されることになります。事例研究の一義的な定義は難しいですが、これまで「事例報告」として扱われてきたものも含めて大切な研究と位置づけることが必要だと思います。このように『大学地域連携学研究』は、理論と実践を両輪とした学際応用理論として学びのプラットフォームとなっていくことでしょう。アカデミックなエビデンスの導出は質の高い「大学地域連携」を生み出すことを確信しています。

最後になりますが、ここにスタートする『大学地域連携学研究』を会員の皆様に筆を振るっていただきよりよき研究誌として発展し、大学地域連携の実践に寄与するものとして育てていただくことをお願いして稿を閉じたいと思います。会員の皆様の積極的な投稿をお待ちしております。